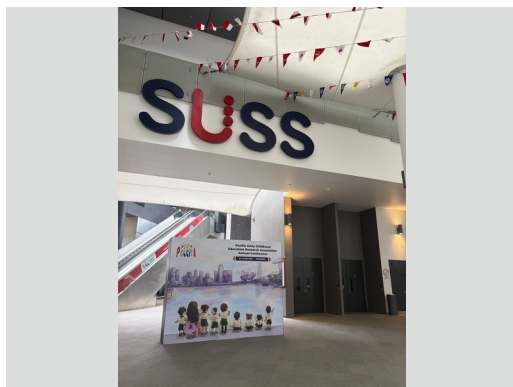


2025年度 研究成果報告書

所属機関名	帝京科学大学
申請者氏名	富岡 麻由子
研究課題名	子どもの遊びの充実と連続性を支える保育施設と家庭の連携



国際学会会場となったSingapore
University of Social Sciences

【研究の概要】

本研究は、子どもの遊びの充実と連続性を支える保育施設と家庭の連携についての研究である。より具体的には、保育者が家庭での子どもの遊びや遊びを通して捉えた子どもの姿について、保護者にどのようなことを伝えるのか、その様相と判断の経緯を明らかにすることを目的とした。保育園に勤務する保育者を対象としたインタビュー調査を行い、保護者との日常的なコミュニケーションについてのエピソードや、その背景にある配慮や意図、気づき等を尋ね、逐語録を質的に分析した。その結果、保育者は保護者や家庭の状況を踏まえて、伝える内容や方法を調整していることが示唆された。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

子どもの遊びは幼児教育・保育において重要な営みとして位置づけられ、その意義については多くの研究が蓄積されている。また、子どもの遊びは、保育施設だけでなく家庭においても展開される営みであり、その連続性を支えるためには保育施設と家庭との相互理解と協働が重要であり、日常的な保護者とのコミュニケーションは、その連携を支える機会となる。しかし、保育者が遊びをめぐる情報を日常の保護者とのコミュニケーションのなかでどのように位置づけ、何をどのように共有しているのか、その実践の実態については十分に検討されていない。そこで本研究では、保育園に勤務する保育者を対象とした半構造化インタビューを実施し、保護者とのやりとりの具体的なエピソードや、その背景にある配慮や考えについての語りを対象とし、質的に分析した。

助成期間中には、関連文献の収集・整理を行うとともに、保育者へのインタビュー調査を実施し、逐語録の作成および質的分析を進めた。現在もデータの収集および分析を継続しており、分析結果の整理と解釈を進めている。これまでに収集したデータの分析からは、保育者による保護者とのコミュニケーションは一律の対応ではなく、子どもの姿や家庭の状況、保護者との関係性に加え、園としての方針や職員間での情報共有・相談も踏まえながら、その都度伝える内容や伝え方を判断していることがうかがえた。今後も分析を継続し、保育者による保護者とのコミュニケーションの特徴や、その判断のプロセスについてさらに検討を深める。研究結果の詳細については、学術論文等で報告する予定である。

2026年7月にシンガポールで開催された環太平洋幼児教育学会大会（PECERA2026）において、本研究の成果の一部についてポスター発表を行った。国外の研究者や実践者との意見交換を通して、本研究の着眼点や分析の方向性について多くの示唆を得ることができた。また、各国・地域では家庭との連携の制度や文化的背景は異なるものの、保育者と保護者とのコミュニケーションに関する課題には共通する関心が見られ、本研究の問題意識を国際的な視点から捉え直すとともに、今後の分析を深めるための視点や課題を整理する貴重な機会となった。

本助成により、調査・分析に必要な研究環境を整備し、計画的に研究を遂行するとともに、研究成果を国際学会で発信する機会を得ることができた。これらの経験は、研究内容を見直し、今後の分析の深化と論文化の方向性を検討するうえでも大きな支えとなった。

2. 今後の研究の見通し

本研究では、保育者が子どもの遊びをめぐる情報を保護者にどのように伝え、その際にどのような判断を行っているのかを明らかにすることを目的として研究を進めてきた。助成期間中に収集したインタビューデータについては、今後もデータの収集と分析を継続し、保育者による保護者とのコミュニケーションの特徴や、その判断のプロセスについてさらに検討を深める予定である。特に、保育者が子どもの姿、家庭の状況、保護者との関係性、園としての方針などを踏まえ、どのように伝える内容や方法を調整しているのかを、個々の事例の文脈を丁寧に読み解きながら整理することで、保育施設と家庭との連携を支える実践としてその特徴や意義を明らかにしていきたい。研究成果については、学術論文として公表するとともに、国内外の学会における発表を継続し、研究者や実践者との議論を通して考察をさらに深めたい。

また、本研究で得られた知見は、これまでに申請者が行ってきた、保護者を対象とした保育施設と家庭での遊びの研究とも関連づけながら発展させたいと考えている。本研究で得られた保育者による保護者とのコミュニケーションに関する知見と、これまでの保護者を対象とした研究成果を統合的に検討することで、保育施設と家庭との連携を多角的に捉え、子どもの遊びの充実と連続性がどのように支えられているのかを明らかにしたい。これにより、保育施設から家庭への一方的な情報提供だけではなく、保育者と保護者の相互理解や協働という観点から、遊びをめぐる連携のあり方について検討を深めることができると考えている。保育施設と家庭をそれぞれ独立した場としてではなく、子どもの経験が連続する生活の場として捉える視点を深めることにもつながると考えている。

さらに、得られた知見の保育実践への還元も視野に入れている。保育者による保護者とのコミュニケーションは、日常的で短時間のやり取りでありながら、子どもの姿や家庭の状況を踏まえた専門的な判断の積み重ねによって成り立っている。本研究によって、そうした判断や配慮を具体的に示すことは、保育者自身が実践を振り返る際の視点となり得ることや、保育者の養成や現場での研修等において、保護者とのコミュニケーションを考えるための資料となることが期待される。将来的には、学術的な成果の公表を進めるとともに、保育施設と家庭とのよりよい連携の実現に資する知見として整理し、保育実践へ還元していきたい。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

TOMIOKA, M. What Do Early Childhood Educators Communicate to Parents about Children's Play? A Qualitative Study Based on Interviews. Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 2026 Conference, Singapore, 10-12 July 2026. (Poster presentation)